広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第53号　2004　375－384

占領下の日本における家庭科教育の成立と展開（XVIII）

－CIE教育映画『明るい家庭生活』の現代的意義－

柴　静子

（2004年9月30日受理）

The Establishment and Development of Homemaking Education in Japan under the Occupation (XVIII)
—The modern meanings of the CIE education film, "FOR A BRIGHT HOME LIFE"—

Shizuko SHIBA

In Post-World War II occupied Japan, Maude Williamson in CIE ordered Oizumi Studio Co. to produce the movie of Japanese kitchen improvement. The content of the movie of "FOR A BRIGHT HOME LIFE" showed that a dark and inconvenient kitchen had been changed modernized one by the girl's home project. This report clears the modern meanings of the movie.

The results were as follows:

1. "FOR A BRIGHT HOME LIFE" showed that a dark and inconvenient kitchen had been changed modernized one by the girl's home project.
2. About 40% of the senior high school students who saw this movie answered that it was so interesting.
3. About 80% of the students thought that there was no problem to solve in their own homes.
4. About 50% of the students thought that this movie was useful for the home improvement in the developing countries.
5. As far as the students saw this movie simply, they couldn't appreciate the value of this one. By showing them it and making a home project carry out, they are able to combine this movie with the home improvement in the developing countries.

Key words : secondary homemaking education, CIE education film, home project, kitchen improvement, developing countries

キーワード：高等学校家庭科，CIE教育映画，ホームプロジェクト，台所改善，発展途上国

はじめに

新制高等学校における家庭科教育の成立と展開過程を明らかにしようとした一連の論稿も今般で18報となり，残された研究課題は，1951（昭和26）年6月11日に制定された産業教育振興法への家庭科の組込みの検証及び占領期家庭科教育改革の総合的な評価が主なものとなった。

そこで，今回の研究では，GHQ/SCAP,CIE（民間情報教育局）のモード・ウィリアムソン（Maude Williamson）が1950（昭和25）年に日本側に制作させた，女子高校生の台所改善のホームプロジェクトをテーマとするCIE 教育映画『明るい家庭生活』[1)] を取り上げて，その現代的な意義を探ることにより，占領期家庭科教育改革の総合的評価を行うための実証的な資料を得ることを目的とした。

研究の手順は次のとおりであった。

まず，ビデオ版に変換した『明るい家庭生活』を広島大学附属中・高等学校，同附属福山中・高等学校，静岡県立磐田北高等学校，広島県立竹原高等学校の家庭科授業に組み込んでもらい，ホームプロジェクト指導と連動させて生徒（計477人）に視聴させ，その反応をアンケート調査（I）を実施することにより把握した。

次いで，戦後日本の生活改善の体験が発展途上国の開発援助に寄与するという研究成果に基づき，広島大学の両附属中・高等学校において，『明るい家庭生活』

を視聴させた後，ホームプロジェクトについて説明し，夏期休暇中に実践させて，２学期の開発途上国理解の学習にリンクさせるという実験授業を試みた。ホームプロジェクトの実践および途上国理解のためのJICAビデオ「地域住民の生活改善に挑む～グァテマラ・パツン３人娘の活躍」[2]の視聴に対する生徒の反応は，アンケート調査(II)から把握した。調査対象者は，高校生190人（男子100人，女子90人）であった。

さらには，広島県と富山県の高等学校家庭科教師68人に『明るい家庭生活』を視聴してもらい，アンケート調査(III)を実施して，指導者の立場からこの映画をどのように受け止めたかを把握した。

実験授業とアンケート調査(I)～(III)の実施時期は，2003(平成15)年７～11月であった。

Ⅰ．CIE教育映画『明るい家庭生活』の現代的意義を見出すための授業

本研究では，家庭科の授業とは無関係に高校生に『明るい家庭生活』を視聴させ，事後にアンケート調査を実施して，その結果からこの映画の普遍的価値を見出すという通常の方法は取らなかった。なぜならば，この映画の視聴とホームプロジェクト指導をどのように連動させれば，占領期の教育遺産であるこの優れた教育方法の振興に繋がるのかという視点から，当映画の現代的価値を探ろうとしたからである。それゆえに，『明るい家庭生活』とホームプロジェクト指導をいかに授業に組み込むかという構成の仕方によって，生徒の反応に差が出てくることは予測できた。むしろ，どのような授業構成において『明るい家庭生活』が本来の意義を発揮できるのかを見出すためには，この差が出ること自体が望ましいと考えた。そこで，以下に各校で行った授業の構成を示し，アンケート調査の結果を解釈する際の条件としたい。

(1) 附属中・高等学校の授業構成

附属中・高等学校の高校２年２組（40人クラス）を対象とした授業では，これまでの広島大学学部・附属共同研究の成果を踏まえて，大正期の生活改善同盟会による生活改善運動から戦後の生活改良普及員による農村の生活改善までの歩みをポスターや映画『緑の自転車』のビデオ版を使用しながら辿った。そして改良普及員と同様の活動が高校生のホームプロジェクトとして実行されたことを知らせて『明るい家庭生活』を視聴させ，夏期休暇中にホームプロジェクトを実施するという課題を与えた。この後，『明るい家庭生活』に関するアンケート調査(I)を行った（７月14日）。

新学期に入り，９月29日には，JICAの啓発ビデオ「地域住民の生活改善に挑む～グァテマラ・パツン３人娘の活躍」を視聴させた。10月２日には，夏期休暇中に実施したホームプロジェクトのうち，発展途上国の生活課題でもある栄養改善に取り組んだものなど，２件を発表させた。次いで，グァテマラに観光部門のJICA隊員として派遣されていた田中順子氏の講演を聞かせ，その後，ホームプロジェクトおよびJICAビデオ視聴に関するアンケート調査(II)を実施した。

10月２日に発表した生徒を除く全員がホームプロジェクトの発表を行ったのは11月７日であった。

なお，以上の授業は，「家庭総合」（４単位）の中に位置付けて，同校の一ノ瀬孝恵教諭が実施した。

(2) 附属福山中・高等学校の授業構成

附属福山中・高等学校では，高校１学年の４クラスを対象として授業を行った。授業者は高橋美与子教諭と小林京子教諭であり，対象の生徒は男子82名，女子74名の合計156名であった。

授業は，「家庭基礎」（２単位）において実施するため，合計３時間という短時間で完了するように指導計画を立てた。以下に指導の概略を示す。

７月に，①ホームプロジェクトについての説明，②『明るい家庭生活』についての説明と視聴，③ホームプロジェクトのテーマ設定とまとめ方についての説明という３つを組合わせた授業を１時間で行い，夏期休暇中にホームプロジェクトを実施するように指示した。この授業の最後で，アンケート調査(I)を実施した。

２学期に入り，９～10月に２時間の授業を組んで，JICAビデオ『地域住民の生活改善に挑む』の視聴と生徒が実施したホームプロジェクトの発表を行った。発表後，アンケート調査(II)を実施した。

７月に行われた最初の授業では，ホームプロジェクトに関して，次の重要な３点が生徒に説明された。その１は，ホームプロジェクトとは，授業で学習したことを基にして自分の家庭生活の問題点を見つけ，その改善向上を目指して，テーマを設定して家族と協力しながら問題の解決を図り，結果を反省・評価して次の新たな課題の発見と解決へとつなげていく活動であること，その２は，授業の中で学んだことを生活に生かすことで家庭科はより充実したものへと発展していくこと，その３は，昭和20年代から30年代に生活改良普及員が農村生活を改善していったように，高校家庭科のホームプロジェクトも戦後日本の家庭生活の改善に重要な役割を果たしたことである。

次いで，CIE教育映画『明るい家庭生活』の視聴の際には，この映画が1950（昭和25）年に製作された

もので，当時の高校生が社会の大きな課題であった台所改善をテーマに選んで，ホームプロジェクトを実行していった内容であることを伝え，ホームプロジェクトの手順や実行の結果，家庭生活の改善にどのように役立ったかという２点に注目するように指示した。

さらに夏期休暇中に実施するホームプロジェクトについては，最初にテーマ設定とまとめ方について説明をし，実施の対象は，自分の生活を改善していくという観点であれば衣・食・住などどの分野でもよいこと並びに家族と相談しながらテーマを決めることを確認した。そして戦後十数年間の日本の生活改善運動の経験が現在の途上国の開発援助に生かされていることを知らせ，ホームプロジェクトのテーマ決定の際には途上国の人々にも伝えたい問題に着目して，自分の家庭生活の改善が地域から世界に広がることを想定して選択するように促した。ここまでで１時間であった。

２学期に入り，９月上旬に，夏期休暇中に実施したホームプロジェクトの記録を提出させて，内容を検討し，発表候補者を選んだ。

９月末から10月上旬に行われた授業の１時間目は，JICAビデオ『地域住民の生活改善に挑む』を視聴させた。途上国の生活の様子をよく見ること，青年海外協力隊として派遣された保健，栄養，農業分野の三人の女性の活動の様子や『明るい家庭生活』のテーマでもあった改良かまどに注目することを視聴上の留意事項とした。２時間目は，途上国の問題と関連をもつテーマでホームプロジェクトを実施していた者を各クラスで５人程度選んで，代表として発表をさせた。他の生徒には，発表の概要，自分の生活の改善に参考にできる点，その他の気づきをメモすること並びに途上国に何かアドバイスできることはないかを考えながら聞くことを指示した。発表終了後に，アンケート調査(II)を行った。

(3) 静岡県立磐田北高等学校の授業構成

磐田北高等学校は，1950（昭和25）年に文部省の新家庭科教育の実験学校に指定され，1951（昭和26）年１月23日にはウィリアムソンが訪問し，同校のホームプロジェクトやユニットキッチンの設備を高く評価した，と記録されている[3]ほどのリーダー的な学校である。

2003年７月，同校で家庭科を担当する小池桂子教諭が，１年生５クラス（合計200人）の「家庭基礎」の授業の中で『明るい家庭生活』を視聴させた。授業構成は次のとおりであった。

まず小池教諭が実教出版の教科書「家庭基礎」を使用して，ホームプロジェクトおよび学校家庭クラブの説明をした。その際に，同校が1957（昭和32）年度の全国高校家庭クラブ第５回研究発表大会において，地域の台所改善のクラブ活動により文部大臣賞を受賞し，その時の副賞が調理室に備えられている食器戸棚であることなどを生徒に知らせた。さらに，この後に視聴する『明るい家庭生活』のホームプロジェクトの内容が受賞時の同校の実践とよく似ていること，また登場人物の制服が同校に近いことなどを話した。この後，『明るい家庭生活』視聴させ，事後にアンケート調査(I)を実施した。以上が１時間の授業内容である。同校では夏期休暇中にホームプロジェクトを実施させたが，途上国と結ぶ授業は行わなかった。

(4) 広島県立竹原高等学校の授業構成

広島県立竹原高等学校は，戦後の新家庭科教育の理念を咀嚼して，新しい家庭科のカリキュラムを開発し，また地域の台所改善等の家庭クラブ活動を熱心に行った学校として知られている。磐田北高等学校と同様に，1957（昭和32）年度の全国高校家庭クラブ第５回研究発表大会において，クラブ活動として取り組んだ「農村における主婦の生活時間の改善」が入賞を果たしたという実績がある。しかし，現在は普通科・商業科の家庭科ではホームプロジェクトおよび学校家庭クラブは実践させず，これらについての説明も行わないことにしている。

７月中旬に，担当教師の協力により，「家庭一般」を履修中の普通科２年生の３クラス（合計83人）で『明るい家庭生活』を視聴させ，事後にアンケート調査(I)を実施した。ただし，授業の最初の25分は映画とは関係のない内容であり，ビデオ視聴の直前に，「今から見るビデオは実際に高校生が行ったものを映画化したものです。古いもので見づらいかも知れませんが，後でアンケートを書いてもらうので，しっかり見てください。」という指示のみが教師から出された。この後，発展途上国の生活改善へと授業を展開することはなかった。

このように竹原高校の場合は，『明るい家庭生活』，ホームプロジェクト，学校家庭クラブに関する説明をしないまま，授業の後半でビデオを視聴させてアンケートに答えさせるという形になったため，他の３校とは異なる反応を得た。

II．『明るい家庭生活』を視聴した教師へのアンケート調査

『明るい家庭生活』の現代的意義を探るためには，高等学校の授業に組み込んで生徒の反応を捉えることはもちろんだが，加えて，ホームプロジェクトや学校家庭クラブを指導する立場にある家庭科教師が，この映画をどのように受け止めるかということの検証が必

要である。そこで，広島県および富山県の家庭科教師，合計68人に『明るい家庭生活』の視聴を依頼し，アンケート調査(I)の10の質問項目のうち，第7問目までに答えてもらった。これをアンケート調査(III)とした。

調査時期は2003年の7～8月で，広島県の10年経験者研修講座や家庭科グループ研究会等に参加した教師40人に加えて，富山県立魚津高等学校で開催された家庭科教育研究会の参加教師28人を調査対象にした。後者の場合は，『明るい家庭生活』に価値を見出した魚津高校の東山潤子教諭の協力を得て調査が実施された。

III. アンケート調査(I)・(III)の結果および考察

両附属中・高等学校の生徒194人を対象としたアンケート調査(I)の質問項目は，①「『明るい家庭生活』は興味深い内容であったか」，②「『明るい家庭生活』を見て，家庭生活の改善のためにはホームプロジェクトが必要と思うようになったか」，③「『明るい家庭生活』を見てホームプロジェクトの実施方法がわかったか」，④「『明るい家庭生活』を見て，ホームプロジェクトを行うことによって家族の関係がよくなると思ったか」，⑤「『明るい家庭生活』を見て，50年前の日本では台所改善が大きな課題であったことが分かったか」，⑥「『明るい家庭生活』を見て，50年前の主婦の家事労働は非能率的であったことが分かったか」，⑦「『明るい家庭生活』は現代の生活改善のために役立つか」，⑧「あなたの家庭にはホームプロジェクトによって改善されそうなことがあるか」，⑨「ホームプロジェクトを行って家庭生活を改善してみたいと思うか」，⑩「ホームプロジェクトの実施に家族が協力してくれそうか」というものであった。

また，教師68人を対象としたアンケート調査(III)の質問項目は7つで，上記の①～⑦と同じものであった。

各項目について，「とてもそう思う」，「ややそう思う」，「どちらでもない」，「あまりそう思わない」，「全くそう思わない」の5段階で尋ねたが，肯定的意見と否定的意見をより明瞭にとらえるため，最初の2つを「肯定」に，また最後の2つを「否定」にまとめて，全体で3段階に納めた。そのうえで χ^2 検定を行って，学校間，男女間および生徒と教師間の有意差の有無を調べた。集計結果については，表1および表2を参照されたい。

以下はアンケート調査(I)・(III)の結果と考察である

1．『明るい家庭生活』の内容が興味深かったと答えた生徒は全体の41.7%であり，半数に至らなかったが，逆に面白くなかったと否定的に受けとった者は26.6%と割合が低かった。この項目については，学校格差と男女差が大きく，χ^2 検定を行ったところ，1%の危険率で高校間および男女間に有意差が見られた。すなわち，両附属高校，磐田北高校，竹原高校の順で，また女子が男子よりも興味をもったことが示された。

2．この映画を視聴して，家庭生活改善のためにはホームプロジェクトが必要だと考えるようになった生徒は全体の53.0%であった。χ^2 検定の結果，1%の危険率で高校間および男女間に有意差があった。すなわち，両附属高校，磐田北高校，竹原高校の順で，また女子が男子よりも必要を感じたことが示された。

3．ホームプロジェクトの実施方法が分かったと答えた生徒は48.4%であった。χ^2 検定の結果，1%の危険率で高校間および男女間に有意差があった。すなわち，両附属高校，磐田北高校，竹原高校の順に理解度が高く，また男子よりも女子がよく理解したことが示された。

4．ホームプロジェクトによって家族関係がよくなると思った生徒は56.8%であった。高校間では1%，男女間では5%の危険率で有意差が見られた。

5．戦後日本において台所改善が大きな課題であったことを理解した生徒は82.2%，主婦の家事労働が非能率的であったことを理解した者は80.1%と高い数値を示した。この項目においても，高校間及び男女間に1%の危険率で有意差がみられた。

6．『明るい家庭生活』が現在の生活改善に役立つと思った生徒は34.6%，逆に役立たないと思った者は37.7%であった。また自分の家庭生活には改善点がないと思っている生徒が41.3%に至り，改善点があると認識している者を10%上回った。さらに，ホームプロジェクトにより家庭生活を改善してみたいと答えた生徒は34.4%ほどであったが，一方，改善したくないと否定した者は16.6%に過ぎなかった。約半数にあたる48.5%が「どちらともいえない」と答えており，ビデオ視聴の段階では，ホームプロジェクトへの動機づけは十分ではないが，全くできていない訳ではなかったといえる。また，ホームプロジェクトを実施する場合に，家族が協力すると思っている生徒は46.7%であり，協力しないと思っている生徒（19.6%）の約2倍となっている。

7．全質問項目において，竹原高校の生徒の意識が低調であった。これは，『明るい家庭生活』の単独視聴に依拠していると思われる。

8．殆どの質問項目において，男女間に有意差が見られ，女子が男子より，肯定的な反応を示した。

9．質問1～7まで全ての項目にわたって，家庭科教師と生徒間に1%の危険率で有意差があり，教師は，この映画が半世紀前の台所や家事労働の有り様を興味深く見せつつ，ホームプロジェクトの方法を

表１『明るい家庭生活』視聴後のアンケート調査（Ｉ）の結果（学校別）

		附属広島(38人)	附属福山(156人)	磐田北(200人)	竹原(83人)	合計(477人)
1.「明るい家庭生活」は興味深い内容だ	肯定	18 (47.4%)	75 (48.1%)	85 (42.5%)	21 (25.3%)	199 (41.7%)
	中間	8 (21.1%)	50 (32.1%)	69 (34.5%)	22 (26.5%)	149 (31.2%)
	否定	12 (31.6%)	31 (19.9%)	45 (22.5%)	39 (47.0%)	127 (26.6%)
	無回答	0	0	1 (0.5%)	1 (1.2%)	2 (0.4%)
2.生活改善の為にﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄが必要だ	肯定	14 (36.8%)	100 (64.1%)	114 (57.0%)	25 (30.1%)	253 (53.0%)
	中間	9 (23.7%)	33 (21.2%)	62 (31.0%)	29 (34.9%)	133 (27.9%)
	否定	15 (39.5%)	23 (14.7%)	21 (10.5%)	26 (31.3%)	85 (17.8%)
	無回答	0	0	3 (1.5%)	3 (3.6%)	6 (1.3%)
3. ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの実施方法が分かった	肯定	23 (60.5%)	96 (61.5%)	101 (50.5%)	11 (13.3%)	231 (48.4%)
	中間	5 (13.2%)	34 (21.8%)	48 (24.0%)	25 (30.1%)	112 (25.3%)
	否定	10 (26.3%)	25 (16.0%)	46 (23.0%)	44 (53.0%)	125 (26.2%)
	無回答	0	1 (0.6%)	5 (2.5%)	3 (3.6%)	9 (1.9%)
4. ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄで家族関係がよくなる	肯定	15 (39.5%)	99 (63.5%)	128 (64.0%)	29 (34.9%)	271 (56.8%)
	中間	13 (34.2%)	31 (19.9%)	45 (22.5%)	30 (36.1%)	119 (24.9%)
	否定	10 (26.3%)	26 (16.7%)	23 (11.5%)	22 (26.5%)	81 (17.0%)
	無回答	0	0	4 (2.0%)	2 (2.4%)	6 (1.3%)
5. 50年前は台所改善が課題だった	肯定	35 (92.1%)	144 (92.3%)	166 (83.0%)	47 (56.6%)	392 (82.2%)
	中間	2 (5.3%)	4 (2.6%)	20 (10.0%)	16 (19.3%)	42 (8.8%)
	否定	1 (2.6%)	8 (5.1%)	12 (6.0%)	19 (22.9%)	40 (8.4%)
	無回答	0	0	2 (1.0%)	1 (1.2%)	3 (0.6%)
6. 50年前の家事労働は非能率的だ	肯定	36 (94.7%)	145 (92.9%)	158 (79.0%)	43 (51.8%)	382 (80.1%)
	中間	1 (2.6%)	6 (3.8%)	29 (14.5%)	21 (25.3%)	57 (11.9%)
	否定	1 (2.6%)	5 (3.2%)	10 (5.0%)	18 (21.7%)	34 (7.1%)
	無回答	0	0	3 (1.5%)	1 (1.2%)	4 (0.8%)
7.当映画は現代の生活改善に役立つ	肯定	8 (21.1%)	69 (44.2%)	74 (37.0%)	14 (16.9%)	165 (34.6%)
	中間	12 (31.6%)	26 (16.7%)	56 (28.0%)	34 (41.0%)	128 (26.8%)
	否定	18 (47.4%)	61 (39.1%)	68 (34.0%)	33 (39.7%)	180 (37.7%)
	無回答	0	0	2 (1.0%)	2 (2.4%)	4 (0.8%)
8. ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄで改善される問題あり	肯定	5 (13.2%)	66 (42.3%)	63 (31.5%)	16 (19.3%)	150 (31.4%)
	中間	10 (26.3%)	32 (20.5%)	59 (29.5%)	19 (22.9%)	120 (25.2%)
	否定	23 (60.5%)	58 (37.2%)	75 (37.5%)	41 (49.4%)	197 (41.3%)
	無回答	0	0	3 (1.5%)	7 (8.4%)	10 (2.1%)
9. ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄで家庭生活を改善したい	肯定	9 (23.7%)	69 (44.2%)	76 (38.0%)	10 (12.1%)	164 (34.4%)
	中間	11 (28.9%)	67 (42.9%)	100 (50.0%)	46 (55.4%)	224 (47.0%)
	否定	18 (47.4%)	20 (12.8%)	22 (11.0%)	17 (20.5%)	77 (16.1%)
	無回答	0	0	2 (1.0%)	10 (12.0%)	12 (2.5%)
10.ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ実施に家族が協力する	肯定	22 (57.9%)	81 (51.9%)	102 (51.0%)	22 (26.5%)	227 (47.6%)
	中間	6 (15.8%)	35 (22.4%)	39 (19.5%)	17 (20.5%)	97 (20.3%)
	否定	7 (18.4%)	30 (19.2%)	33 (16.5%)	23 (27.7%)	93 (19.5%)
	無回答	3 (7.9%)	10 (6.4%)	26 (13.0%)	21 (25.3%)	60 (12.6%)

表2『明るい家庭生活』視聴後のアンケート調査（Ⅰ）・（Ⅲ）の結果（男女別，教師）

		男子（209人）	女子（268人）	生徒計（477人）	教師（68人）
1.「明るい家庭生活」は興味深い内容だった	肯定	56（26.8%）	143（53.4%）	199（41.7%）	60（88.2%）
	中間	75（35.9%）	74（27.6%）	149（31.2%）	6（8.8%）
	否定	78（37.3%）	49（18.3%）	127（26.6%）	2（2.9%）
	無回答	0	2（0.7%）	2（0.4%）	0
2.生活改善の為にﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄが必要と思った	肯定	84（40.2%）	169（63.1%）	253（53.0%）	44（64.7%）
	中間	69（33.0%）	64（23.9%）	133（27.9%）	17（25.0%）
	否定	54（25.8%）	31（11.6%）	85（17.8%）	5（7.4%）
	無回答	2（1.0%）	4（1.5%）	6（1.3%）	2（2.9%）
3.ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの実施方法が分かった	肯定	85（40.7%）	146（54.5%）	231（48.4%）	60（88.2%）
	中間	54（25.8%）	58（21.6%）	112（23.5%）	8（11.8%）
	否定	66（31.6%）	59（22.0%）	125（26.2%）	0
	無回答	4（1.9%）	5（1.9%）	9（1.9%）	0
4.ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄによって家族関係がよくなる	肯定	100（47.8%）	171（63.8%）	271（56.8%）	59（86.8%）
	中間	61（29.2%）	58（21.6%）	119（24.9%）	8（11.8%）
	否定	47（22.5%）	34（12.7%）	81（17.0%）	1（1.5%）
	無回答	1（0.5%）	5（1.9%）	6（1.3%）	0
5. 50年前には台所改善が大きな課題だった	肯定	159（76.1%）	233（86.9%）	392（82.2%）	68（100%）
	中間	25（12.0%）	17（6.3%）	42（8.8%）	0
	否定	25（12.0%）	15（5.6%）	40（8.4%）	0
	無回答	0	3（1.1%）	3（0.6%）	0
6. 50年前の家事労働は非能率的であった	肯定	152（72.7%）	230（85.8%）	382（80.1%）	68（100%）
	中間	37（17.7%）	20（7.5%）	57（11.9%）	0
	否定	19（9.1%）	15（5.6%）	34（7.1%）	0
	無回答	1（0.5%）	3（1.1%）	4（0.8%）	0
7.「明るい家庭」は現代の生活の改善に役立つ	肯定	49（23.4%）	116（43.3%）	165（34.6%）	54（79.4%）
	中間	64（30.6%）	64（23.9%）	128（26.8%）	6（8.8%）
	否定	95（45.5%）	85（31.7%）	180（37.7%）	8（11.8%）
	無回答	1（0.5%）	3（1.1%）	4（0.8%）	0
8. 家庭にﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄで改善される問題あり	肯定	58（27.8%）	92（34.3%）	150（31.4%）	
	中間	48（23.0%）	72（26.9%）	120（25.2%）	
	否定	99（47.4%）	98（36.6%）	197（41.3%）	
	無回答	4（2.1%）	6（2.4%）	10（2.3%）	
9.ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄにより家庭生活を改善してみたい	肯定	61（32.6%）	94（37.3%）	155（35.3%）	
	中間	92（42.9%）	121（48.0%）	213（48.5%）	
	否定	32（17.1%）	27（10.7%）	59（13.4%）	
	無回答	2（1.1%）	10（4.0%）	12（2.7%）	
10.ﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの実施に家族が協力すると思う	肯定	81（43.3%）	124（49.2%）	205（46.7%）	
	中間	50（26.7%）	41（16.3%）	91（20.7%）	
	否定	39（20.9%）	47（18.7%）	86（19.6%）	
	無回答	17（9.1%）	40（15.9%）	57（13.0%）	

順を追って描いていることを高く評価していた。

以上のように，『明るい家庭生活』は，非合理的な家事労働や台所設備を改善することが戦後日本の大きな生活課題であったことを伝えるとともに，その具体的な方法であるホームプロジェクトについての理解を深め，生徒の生活改善への意欲を高めたといえる。したがって，現代的な価値をもつ映像であると判断できる。ただし，①ホームプロジェクトの実践を前提として視聴させることが必要であり，竹原高校の場合のように，ビデオの単独視聴では効果が極端に低くなる，②女子に比べて男子の興味・関心を喚起することが難しいジェンダーバイアスのかかった内容である，③生徒の現実の家庭生活問題と緊密に関連させて視聴させる必要がある，という特質を備えているので，これらを踏まえた上で授業に組み込むことが望まれる。

Ⅳ．アンケート調査（Ⅱ）の結果および考察

附属広島中・高等学校（34人）および附属福山中・高等学校（156人）で，『明るい家庭生活』，ホームプロジェクト，発展途上国理解をリンクさせた実験授業を行い，アンケート調査(II)を実施した。

アンケートは18の質問項目から構成されており，質問１～14はホームプロジェクト実施に関するもの，次いで質問15～17は『地域住民の生活改善に挑む』を視聴しての感想を聞いたもの，最後の質問18は，『明るい家庭生活』が描いたホームプロジェクトが途上国の生活改善に貢献するか否かを尋ねたものである。

各項目について，アンケート調査(I)と同様に肯定から否定までの５段階で尋ね，その後，肯定，中間，否定の３段階にまとめ，学校別，生徒全体および男女別にχ^2検定を行った。

調査結果は表３に示したので参照されたい。

各質問に対する結果と考察は次のとおりである。

1．質問１は，「ホームプロジェクトを計画したり，実施することは興味深かったか」というものであり，生徒全体の71.6％が肯定した。ホームプロジェクトを実際に体験することによって，この学習のもつ知的な楽しさや有用性に気づいたことが示されている。

2．質問２は，「ホームプロジェクトを実施することによって自分や家族の生活に関心をもつようになったか」というもので，肯定した生徒は全体の68.4％であった。また質問３は「ホームプロジェクトは生活改善について考えるよいきっかけになったか」というものであり，全体の80.0％が肯定した。さらに質問４の「これからも生活改善について考えたいと思うようになったか」という問いに対しては，全体の70.0％が肯定した。これらの数値から，ホームプロジェクトが，生活感が希薄だといわれている現代の青少年に対して，改めて暮らしに注視させ，改善していくことの大切さを気づかせるよい機会になることが示された。

3．質問５は「ホームプロジェクトを実施することによって，生活を科学的にとらえることに関心をもつようになったか」というものであるが，生徒全体の38.9％が肯定し，17.9％が否定した。家庭生活全般に渡って無関心な生徒が増えている中で，３分の１強に，ホームプロジェクトの体験を通して生活を科学的に見直す意欲がでてきたとすれば，教育効果はあったといえよう。

4．質問６は「ホームプロジェクトを行うときに『明るい家庭生活』が参考になったか」というもので，肯定した生徒は全体の31.6％，逆に否定した者は38.4％であった。『明るい家庭生活』が描いた台所改善は，ユニットキッチンが普通に設備されている現代の生活においては歴史的事実に過ぎないように見えるが，実はそうではなく，ホームプロジェクトのテーマ設定の視点，問題解決の方法，家族の協力の大切さなど，プロジェクト学習を遂行するうえでの理念と手法が盛り込まれている。生徒の理解がここまで及ばないのは当然であるので，教師が『明るい家庭生活』と実際のホームプロジェクトを授業レベルでリンクさせる必要がある。

5．質問７は「わが家の家庭生活を改善することができたか」というもので，生徒全体の55.3％が肯定し，15.8％が否定している。生徒の半数が今回のホームプロジェクトの実効力について満足している。

6．質問８は「生活改善について家族で話し合うことは大切か」という問いで，生徒全体の83.2％が肯定をした。しかし，質問９の「家族が協力してくれたか」では，肯定した生徒が54.2％と割合を落としている。ホームプロジェクトの実施においては，家族との話し合いや積極的な支援・協力態勢を得ることが不可欠であるが，今回は保護者の態勢が十分でなかったようである。ホームプロジェクトの実施に際して教師が保護者を啓蒙し，こどもへの協力・支援の気持ちを高めることが必要となろう。

7．質問10は「ホームプロジェクトは家庭科の授業を充実させるのに必要か」というもので，生徒全体の58.4％が肯定していた。また，質問11は「ホームプロジェクトを実施してよかったか」というもので，全体の68.4％が肯定していた。一般的には，ホームプロジェクトを実施する意義が生徒によく理解されないという問題点があげられている。しかし，今回のホームプロジェクト実践で，家庭科は学校で学ぶだけでは不十分で，家庭での生活改善実習が伴ってはじめて意義をもつことを生徒が体得し，充実感を味わったことは成果として評価できる。

表3　ホームプロジェクトとJICAビデオ視聴に関するアンケート調査（II）の結果

		附属広島(34人)	附属福山(156人)	生徒合計(190人)	男子(100人)	女子(90人)
1. HPの計画・実施は興味深かった	肯定	25(73.5%)	111(71.2%)	136(71.6%)	65(65.0%)	71(78.9%)
	中間	5(14.7%)	27(17.3%)	32(16.8%)	21(21.0%)	11(12.2%)
	否定	4(11.8%)	18(11.5%)	22(11.6%)	14(14.0%)	8(8.9%)
	無回答	0	0	0	0	0
2. HPにより家族生活に関心をもった	肯定	22(64.7%)	108(69.2%)	130(68.4%)	65(65.0%)	65(72.2%)
	中間	9(26.5%)	33(21.2%)	42(22.1%)	24(24.0%)	18(20.0%)
	否定	3(8.8%)	15(9.6%)	18(9.5%)	11(11.0%)	7(7.8%)
	無回答	0	0	0	0	0
3. HPは生活改善の契機になった	肯定	26(76.5%)	126(80.8%)	152(80.0%)	74(74.0%)	78(86.7%)
	中間	6(17.6%)	21(13.5%)	27(14.2%)	19(19.0%)	8(8.9%)
	否定	2(5.9%)	8(5.1%)	10(5.3%)	7(7.0%)	3(3.3%)
	無回答	0	1(0.6%)	1(0.5%)	0	1(1.1%)
4. これからも生活の改善を考えたい	肯定	20(58.8%)	113(72.4%)	133(70.0%)	63(63.0%)	70(77.8%)
	中間	13(38.2%)	32(20.5%)	45(23.7%)	30(30.0%)	15(16.7%)
	否定	1(2.9%)	10(6.4%)	11(5.8%)	6(6.0%)	5(5.6%)
	無回答	0	1(0.6%)	1(0.5%)	1(1.0%)	0
5. 生活を科学的に捉えることに関心	肯定	12(35.3%)	62(39.7%)	74(38.9%)	39(39.0%)	35(38.9%)
	中間	14(41.2%)	66(42.3%)	80(42.1%)	45(45.0%)	35(38.9%)
	否定	8(23.5%)	26(16.7%)	34(17.9%)	14(14.0%)	20(22.2%)
	無回答	0	2(1.3%)	2(1.1%)	2(2.0%)	0
6. HPでは[明るい家庭]が参考になった	肯定	12(35.3%)	48(30.8%)	60(31.6%)	28(28.0%)	32(35.6%)
	中間	8(23.5%)	47(30.1%)	55(28.9%)	25(25.0%)	30(33.3%)
	否定	12(35.3%)	61(39.1%)	73(38.4%)	46(46.0%)	27(30.0%)
	無回答	2(5.9%)	0	2(1.1%)	1(1.0%)	1(1.1%)
7. HPによって家庭生活を改善できた	肯定	19(55.9%)	86(55.1%)	105(55.3%)	54(54.0%)	51(56.7%)
	中間	10(29.4%)	45(28.8%)	55(28.9%)	28(28.0%)	27(30.0%)
	否定	5(14.7%)	25(16.0%)	30(15.8%)	18(18.0%)	12(13.3%)
	無回答	0	0	0	0	0
8. 家族で改善の話をすることは大切	肯定	25(73.5%)	133(85.3%)	158(83.2%)	75(75.0%)	83(92.2%)
	中間	6(17.6%)	17(10.9%)	23(12.1%)	18(18.0%)	5(5.6%)
	否定	3(8.8%)	6(3.8%)	9(4.7%)	7(7.0%)	2(2.2%)
	無回答	0	0	0	0	0
9. HPでは家族が協力してくれた	肯定	18(52.9%)	85(54.5%)	103(54.2%)	48(48.0%)	55(61.1%)
	中間	7(20.6%)	32(20.5%)	39(20.5%)	24(24.0%)	15(16.7%)
	否定	9(26.5%)	38(24.4%)	47(24.7%)	27(27.0%)	20(22.2%)
	無回答	0	1(0.6%)	1(0.5%)	1(1.0%)	0
10. HPは家庭科の充実のために必要	肯定	16(47.1%)	95(60.9%)	111(58.4%)	51(51.0%)	60(66.7%)
	中間	12(35.3%)	45(28.9%)	57(30.0%)	33(33.0%)	24(26.9%)
	否定	6(17.6%)	16(10.3%)	22(11.6%)	16(16.0%)	6(6.7%)
	無回答	0	0	0	0	0

		附属広島(34人)	附属福山(156人)	生徒合計(190人)	男子(100人)	女子(90人)
11. HPを実施してよかった	肯定	20(58.8%)	110(70.5%)	130(68.4%)	62(62.0%)	68(75.6%)
	中間	8(23.5%)	36(23.1%)	44(23.2%)	27(27.0%)	17(18.9%)
	否定	6(17.6%)	10(6.4%)	16(8.4%)	11(11.0%)	5(5.6%)
	無回答	0	0	0	0	0
12.地域や世界の生活改善を考える	肯定	11(32.3%)	55(35.3%)	66(34.7%)	28(28.0%)	38(42.2%)
	中間	8(23.5%)	60(38.5%)	68(35.8%)	38(38.0%)	30(33.3%)
	否定	14(41.2%)	40(25.6%)	54(28.4%)	33(33.0%)	21(23.3%)
	無回答	1(2.9%)	1(0.6%)	2(1.1%)	1(1.0%)	1(1.1%)
13. HP発表を聞くのは興味深かった	肯定	32(94.1%)	153(98.1%)	185(97.4%)	95(95.0%)	90(100%)
	中間	0	0	3(1.6%)	3(3.0%)	0
	否定	2(5.9%)	3(1.9%)	2(1.1%)	2(2.0%)	0
	無回答	0	0	0	0	0
14. 発表は自分の生活にも役立つ	肯定	30(88.2%)	148(94.9%)	178(93.7%)	89(89.0%)	89(98.9%)
	中間	3(8.8%)	5(3.2%)	8(4.2%)	7(7.0%)	1(1.1%)
	否定	1(2.9%)	2(1.3%)	3(1.6%)	3(3.0%)	0
	無回答	0	1(0.6%)	1(0.5%)	1(1.0%)	0
15. JICAビデオは興味深かった	肯定	16(47.1%)	131(94.9%)	147(77.4%)	72(72.0%)	75(83.3%)
	中間	9(26.5%)	22(14.1%)	31(16.3%)	20(20.0%)	11(12.2%)
	否定	9(26.5%)	3(1.9%)	12(6.3%)	8(8.0%)	4(4.4%)
	無回答	0	0	0	0	0
16. ビデオで途上国の生活が分った	肯定	25(73.5%)	137(87.8%)	162(85.3%)	76(76.0%)	86(95.6%)
	中間	5(14.7%)	17(10.9%)	22(11.6%)	20(20.0%)	2(2.2%)
	否定	4(11.8%)	2(1.3%)	6(3.2%)	4(4.0%)	2(2.2%)
	無回答	0	0	0	0	0
17. 途上国に生活改善を伝える必要	肯定	22(64.7%)	142(91.0%)	164(86.3%)	87(87.0%)	77(85.6%)
	中間	8(23.5%)	9(5.8%)	17(8.9%)	8(8.0%)	9(10.0%)
	否定	4(11.8%)	4(2.6%)	8(4.2%)	5(5.0%)	3(3.3%)
	無回答	0	1(0.6%)	1(0.5%)	0	1(1.1%)
18. [明るい家庭]は途上国に貢献する	肯定	24(70.6%)	113(72.4%)	137(72.1%)	70(70.0%)	67(74.4%)
	中間	5(14,7%)	26(16.7%)	31(16.3%)	16(16.0%)	15(16.7%)
	否定	5(14.7%)	17(10.9%)	22(11.6%)	14(14.0%)	8(8.9%)
	無回答	0	0	0	0	0

8．質問12は「地域や社会全般，さらには世界の生活改善というところまで考えるようになったか」というものであったが，肯定した生徒は全体の34.7%，否定した者は28.4%であった。今回の実験授業の大枠は，『明るい家庭生活』を使用して戦後日本の生活改善の歴史を往還し，ホームプロジェクト実践と途上国理解のビデオ視聴を通して，国際援助のあり方を考えさせるということであった。この枠組みは変えず，授業構成を再考して，より効果的なものに向上させることによって，生活改善という視点から国際理解・援助を考える人間の育成に寄与できると思われる。

9．質問13は「友達のホームプロジェクトの発表を聞くのは興味深かったか」で生徒全体の97.4%が肯定し，さらに質問14の「友達の発表は自分の生活にも役立つところがあったか」では93.7%という高い肯定的反応が示された。ホームプロジェクトを実施させても時間的な制限から，発表を行わせない場合もあるが，代表者だけによる発表ですら大きな効果をもつことが確認できた。

10．質問15の「『地域住民の生活改善に挑む』のビデオは興味深かったか」では生徒全体の77.4%が，また質問16の「同ビデオを見て発展途上国の人たちの生活の様子がわかったか」では85.3%が，さらに質問17の「同

ビデオを見て，発展途上国の人々の生活改善のために私たちの経験を伝えることは必要だと思ったか」では86.3%が肯定していた。途上国理解のためのビデオはJICAプラザなどから借用できるが，日本の家庭科の内容や方法と密接に関連したものはそれほど多くない。そのような中で『地域住民の生活改善に挑む』には，『明るい家庭生活』の中で女子高校生が実施したと同じようなカマドの改善がJICA隊員の手でなされたという場面が入っている。戦後日本の生活改善と途上国のそれがリンクしていることが納得できる内容である。

11. 最後の質問18は「『明るい家庭生活』の中に出てくるホームプロジェクトは，発展途上国の生活改善に貢献すると思うか」というもので生徒全体の72.1%が肯定している。表1・2のアンケート調査の質問7が示すように，『明るい家庭生活』を視聴させた直後に，この映画の内容が現代の生活改善に役立つと思うかと聞いたところでは，肯定したのは，附属中・高校で21.1%，附属福山中・高等学校で44.2%であった。それが『地域住民の生活改善に挑む』を視聴させることによって，両校とも約70%の生徒が，『明るい家庭生活』で描かれた台所改善のホームプロジェクトは途上国に貢献すると考えるようになった。このことから『明るい家庭生活』は，カマドの改善を初めとする途上国開発援助とリンクさせることによって，その教育的意義をより現代的なものに変化・向上させていくといえよう。

12. 附属中・高等学校および附属福山中・高等学校を比較すると，両者に有意差が見られたのは，アンケート調査(I)では,質問2(1%有意),質問4(5%有意),質問7(5%有意),質問8(1%有意),質問9(1%有意)であった。いずれの項目においても附属福山中・高等学校が高い意識を示した。この原因が，授業構成に依拠するものか，それとも生活に対する生徒の低い価値観に基づいたものなのかと考えると，後者の影響が強いように思われる。なおアンケート調査(III)においては，両校で有意差が見られたのは，質問15(1%有意)，質問16(1%有意)，質問17(1%有意)であり，いずれも附属福山中・高等学校の意識が高かった。この原因として，附属中・高等学校ではグアテマラ派遣のJICA隊員田中順子氏を招き，生徒に講演を聞かせたが，実体験だけに相当なインパクトがあり，このため，本来ならば効果を発揮するはずのJICAビデオの印象が逆に薄まったことが考えられる。

13. アンケート調査(II)においては，男女生徒の有意な差は質問10にのみ見られ，「ホームプロジェクトは家庭科の充実のために必要」と思っているのは，女子生徒に多いことが示された。

以上のように，『明るい家庭生活』からホームプロジェクト実践を経て，開発途上国の生活改善へと結ぶ2タイプの実験授業を両附属中・高等学校で実施した。その結果，『明るい家庭生活』は，日本の生活の歴史を往還し，途上国と結ぶことによって，教育的意義をより深化させることが明白になった。

V.『明るい家庭生活』の現代的意義 —おわりにかえて

本研究では，CIEのM.ウィリアムソンが日本側に制作させた『明るい家庭生活』の現代的意義を見出すことを目的とした。高校生への実験授業ならびに生徒と教師を対象としたアンケート調査によって，その意義を実証的に把握することができた。即ち，①近年，指導が困難だと敬遠されがちなホームプロジェクトに関して，学習者の興味を喚起し，これのもつ優れた理念や方法を理解させることのできる映像である，②発展途上国の生活改善に役立つ内容を取り扱っており，これを射程に入れて総合的に授業を構成した場合，より高い教育効果を発揮する，③一方，内容的にはジェンダーバイアスがかかっており，男子生徒の興味を喚起しにくいという傾向にあることである。

これらを踏まえて，戦後の家庭生活や家事労働の姿を伝え，ホームプロジェクトを振興し，途上国を理解させるための映像教材として利用することで，『明るい家庭生活』は現代の家庭科教育に甦る。

【注】

1)『明るい家庭生活』は，GHQのCIE(民間情報教育局)の高等学校家庭科教育政策を物語る映像資料である。戦後，日本国憲法や新民法の制定によって女性は解放されたとはいえ，非能率的で重い家事労働は，依然，主婦の肩にかかっていた。この映画は，母の家事労働を軽減するために，東京八王子に住む二人の女子高校生(光子と啓子)が家庭科で学んだ知識や技能を生かして，家族と協力して台所改善のホームプロジェクトを実行するというものであり，当時の大きな社会的課題であった家庭生活の近代化を新しい教育方法を通して達成することが意図されていた。

2) このビデオは，グアテマラのパツン市で，青年海外協力隊員として活躍している農業，栄養，保健分野の3人の女性の日常生活を描いたものである。3人は生活改善援助の最初として，熱効率が悪いため調理時間が長くかかり，また排煙機能をもたないため呼吸器疾患をおこしやすいカマドを改良した。

3) "Reports-TDY", GHQ/SCAP, CIE Records Box no.5757.